那須与一伝承館通信〈第6回〉

◎屋島合戦図

今回は那須与一伝承館が収蔵する資料の中から、屋島合戦図を紹介します。

屋島合戦図は、那須家に伝来した屋島の戦いにおける那須与一宗隆（宗高）の活躍を描いたものです。二本の掛軸からなり、左幅に弓を構える与一を、右幅に扇の的を掲げる小船と平氏の軍船を描いています。作者は不明ですが、作品の状態などから、江戸時代中頃のものかと思われます。

屋島の戦いとは、元暦二年（文治元年・一一八五）二月に讃岐国屋島（現在の香川県高松市）で行われた源平の戦いです。前年の一ノ谷（現在の兵庫県神戸市）での敗戦後、平宗盛は安徳天皇を奉じて屋島に立て籠もりましたが、源義経に攻められて瀬戸内海を敗走しました。この戦いで、与一は見事に扇の的を射落とし、一躍その名を知られることになったのです。

したがってこの絵は与一の武功を伝えるために、那須家が描かせた掛軸だったのではないでしょうか。実に、那須家の人々の誇らしい気持ちが伝わってくる逸品です。

■問い合わせ
那須与一伝承館
TEL（20）0220

左幅

右幅

屋島合戦図（二幅）

彫刻周遊 ⑬

市内で作られた作品とその作者

このコーナーは、「那須野が原国際彫刻シンポジウム」で公開制作、設置された作品とその作者を連載で紹介します。

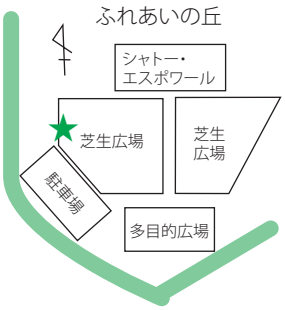
この作品は、ふれあいの丘の芝生広場の西側に並ぶ彫刻群のうち、南側の大駐車場に最も近い位置にある作品です。

記憶された地・在から
―地殻について―
大塚　道男　（愛知県）　1998年

作者は、この作品の制作を通して「地球の皮膚とでもいうような地殻」について考えてみたといいます。宇宙や地球は美しいと感じているのに、自分の足元にある「大地については、あまりにも無知であった」ことを知ります。平らに磨かれた天辺の一方が高く盛り上がり荒削りの石の面が顔をのぞかせている様は、足元で人知れずうごめく「隆起と沈降」を意図したものなのでしょうか。東日本大震災に揺れる今日の日本の有様を物語るような作品ともいえます。

大塚 道男 氏

設置場所案内図（★印）



作者の大塚道男氏は、1954年に東京都に生まれ、現在は愛知県立美術大学の教授。本シンポジウム参加後も個展や各地のシンポジウムに積極的に参加し、近年は国立新美術館で行われた「国展」にも出展されています。

■問い合わせ
文化振興課文化振興係　TEL（23）8718